

# 新たな人間とメディアの関係への哲学的探求

## —メディア論への“vice-diction”概念の応用—

### A philosophical investigation of the new relationship between human and media to apply the concept "vice-diction" for the media theory

霜山博也\*<sup>1</sup>

Hiroya Shimoyama

\*<sup>1</sup>名古屋芸術大学 Nagoya University Of Arts

**要旨:** 本研究では、マクルーハンなどのメディアへの哲学的考察に依拠しつつ、「管理社会」における問題点に対抗するため、ジル・ドゥルーズが提唱した“vice-diction”という概念が有効であることを示すのが狙いである。

**キーワード:** メディア論, マクルーハン, 中動態, 管理社会, vice-diction

**Abstract:** In this study, for the first, we will consider Marshall McLuhan's media theory and Maurice Merleau-Ponty's intermediate philosophy. And then, we will critically notice the concept middle voice. Finally, we will show the validity of the concept "vice-diction" proposed by Gilles Deleuze for to counter the problems of the control society and compulsion.

**Keywords:** media theory, Marshall McLuhan, middle voice, control society, vice-diction

#### 1. はじめに

本研究は、メディアに対する哲学的考察を行い、新たな人間とメディアの関係を探求するのが目的である。そのために、まずはマーシャル・マクルーハンを参照し、彼のメディアに対する哲学的考察を検討する。そこから、mediaの単数形であるmediumの「中間にあるもの、間に取り入って媒介するもの」という意味に注目し、モーリス・メルロ＝ポンティの哲学を考察し、さらに言語学に影響された「中動態」という概念があることを批判的に確認する。最後に、現代情報化社会においてメディア上の言葉（とくに、《私》という人称代名詞）が、私たちの思考と行動にどのように影響を与えているのかを確認し、それらがもたらす問題点に対抗する方法論として、ジル・ドゥルーズが提唱した“vice-diction”という概念が有効であることを示すのが狙いである。それは、マクルーハンとは反対に、メディアの個々の「内容」をそれぞれ徹底的に独立させて思考することに繋がるだろう。

#### 2. メディアはメッセージである

まず、メディアとは何であろうか。現代においては、さまざまなメディア論があり、それぞれの視点からメディアについての分析がなされている。たとえば、伊藤秀一はマニピュレーションとしてのメディアを内容のメディア論と呼び、メディアの物質的特性を考察するものを形式のメディア論と呼ぶ。前者は、政治や資本との（論者の視点による）関係からメディアを論じることなどを行う。そして、後者は「メディア技術と人間の知覚や感性の変化の関係に注目し」、メディアが「人間の知覚や感性にとっての媒質という観点を出发点とする[伊藤, p.1]」ことが特徴である。そのとき、「メディア」とは以下のことを意味するようになる。

媒質とは mediaの単数形 mediumの訳語の一つで、たとえば空気が音の媒質であるように、あるものの存在や作動の可能性の物質的条件や環境を意味する。ここで「媒質」という物理

学で用いる特殊な訳語をあえて用いるのは、二つの項の中間にあって橋渡しをする「手段」という含意から抜け出るためである。…人間の知性や感性が生み出す意味や内容とその

<sup>メディア</sup>媒質の関係を考えた場合、媒質は意味や内容を伝達する手段というよりもむしろ意味や内容が物質的に成就する場だと考えた方が良い。空気がなければ音が存在しないのと同じように、意味や内容が実現する場所がなければ意味や内容は存在しない。そしてそれは実現の場であると同時にその形式でもある。

[同上, pp.1-2]

たとえば、マーシャル・マクルーhanは、「メディアはメッセージである[1988, p.8]」や「メディアはマッサージである[2015, p.28]」という言葉で有名だが、まさにこの「媒質」や「物質的に成就する場」としてメディアを考察した。彼はメディアを分析する際に、その「内容」である情報ではなくて、メディアの「形式」そのものを重視する。

この事実はすべてのメディアの特徴であるけれども、その意味するところは、どんなメディアでもその「内容」はつねに別のメディアである、ということだ。書きことばの内容は話しことばであり、印刷されたことばの内容は書かれたことばであり、印刷は電信の内容である。

[マクルーhan, 1988, p.8]

こうしてさまざまなメディアはある意味では入れ子状になっていき（話しことば→書きことば→印刷されたことば→電気通信…）、あるメディアの内容は別のメディアの形式でしかなくなる。マクルーhanはメディアを介して「どんな情報が送られているのか」、あるいは、「どんな効果を狙ったメッセージなのか」などといったことは問わないのであり、メディアが何かの橋渡しをするものや、何かの「手段」とも考えない。彼はメディアの「形式」を「内容」から徹底的に独立させることで、その思考をスタートさせているのだ。

人類にとって、最初に大きな変化をもたらしたメディアは文字（表音アルファベット）である。それまではコミュニケーションは話し言葉が主であり、身体感覚は聴覚が優位であったが、それが視覚へと移行する。また、物の見方として、とくに

文字を読むために一方向に連続して何度も見るようになり、視覚のありかたも限定されるようになった。さらに、アルファベット文字自体に意味はなく、それがどのように結びついて単語と文章を形成しているのかを分析する必要がある。そこから、いわゆる合理的推論である、物事を均質な要素に分けて、一直線に結びつけて推論していく習慣が生じた。その後、大きな変化をもたらしたのはラジオである。ラジオの特徴は、聴覚を一方向的に聴くことへと変えたことである。さらに「耳を澄ます」という行為を、たくさんの音や声を聴くためではなく、一つの音や声を正確に聴くことへと変えてしまった。ラジオはある特定の人の声を遠い場所、広い地域に届けることができる、いわば拡張された「話し言葉」といえるが、自由な聴覚ではなく「書き言葉」を含み込んでしまっている。

それに対して、テレビには映像と音の両方があり、一気にさまざまな映像と音が現れてきて、視聴者は自由に視覚と聴覚を働かすことができる。

「テレビのモザイクは、均一的、連続的、あるいは反復的な特徴をもたないし、他の感覚を邪魔するほどに視覚を拡張することがない…さらに、テレビは最小限の情報しか与えずに全感覚の相互作用を即座に生み出す。…関与度の低い、単一感覚的な活字メディアから関与度の高い、複合感覚的な電子メディアへのシフトが起きたのだ。[ゴードン, pp.95-96]」こうして、話し言葉（聴覚）、書き言葉（視覚）、ラジオ（一方向的聴覚）、テレビ（自由な諸感覚）とメディアの形式が変化するにつれて、人間の身体感覚（感性）も変化していった。そのことについてマクルーhanは以下のように述べる。

メディアは、環境に変更を加えることで、それ固有の感覚知覚の比率をわれわれ人間のうちに生み出す。どのひとつの感覚が拡張されても、われわれの思考と行動の仕方—世界を知覚する仕方—は変更される。感覚知覚の比率が変わるとき、人間は変わる。[2015, p.43]

つまり、メディアはマッサージのように、人間の身体をいつの間にか揉みほぐして、身体のありかたを変えてしまうのだ。そして、最後に彼は「地球村」という考えかたから、「束縛の手段、そして、分類の手段として空間を囲い込む」という観念全体が、今日の電子的世界においては、かつてのよう

にうまく機能しない[2015, p.63, 下線引用者]と電子メディアに希望を託した。

マクルーハンは、テレビが聴覚と視覚の平等を取り戻し、言葉とイメージの複雑な編集がもたらす思考の多様性と情報の取捨選択という視聴者の積極性に期待を込めていた。しかしながら、そのような結果にはならなかった。なぜならば、彼が亡くなった1980年代以降、テレビは笑い声・テロップ・ワイプを入れることで、「どこで笑うべきか」「何を聴くべきか」「どんな反応をするべきか」「どんな感情を持つべきか」を視聴者に制限づけるようになったからである。私たちはテレビに視覚と聴覚、さらに身体の反応と感情(情念)までコントロールされるようになった。さらにその後、パソコンと携帯端末の普及によって限られた人にしか手にできなかった情報の発信手段が、あらゆる人へ行き渡るようになった。誰もが言語とイメージを理念上は自由に編集し、世界に向けて発信できるようになったのだ。しかしながら、その編集もテレビから影響を受けており、むしろ他者をコントロールしようとするものである。また、マクルーハンが電子メディアでは「空間を囲い込む」ことが機能しないとしていたが、SNSや動画サイトではブロック機能や、おススメ機能があり、そもそも自分の見たいもの、聞きたいものしか入ってこない。彼は「地球村」の到来を期待したが、むしろ、広い世界をそのまま自分の領土として囲い込む、悪い意味での村社会がやってきたのである。

### 3. 中間的な「場」—身体図式と肉—

メディア論は「内容」と「形式」に注目するものに分けられ、後者の場合、メディアは「あるものの存在や作動の可能性の物質的条件や環境としての媒質」や何か「物質的に成就する場」となる。マクルーハンがメディア自体が人類に対するメッセージという観点から、その「形式」の変化がいかにか、人間の身体感覚(感性)を変えるかということを思考していた。また、彼はメディアが人間の身体における器官を拡張するとも考え、車輪は足の拡張、衣服は皮膚の延長、書物は眼の拡張、ラジオは咽喉の拡張…などと述べている[マクルーハン, 2015, pp.28-43]。メディアにおける「場」は人間の諸器官の感覚比率と諸器官を変化させ拡張するのであり、メディアが媒質となって身体における「場」が作動し、新たな身体のあるかたが生じる。これがまずは、メディアの「形式」をその「内容」から徹底的に独立させる哲学的思考の帰結である。

それに対して、メディアをその語源である medium から、「中間にあるもの」や「橋渡しをするもの」と考えることができるであろう。そして、そのような中間的なものを身体性という側面から哲学的に思考していたのがモーリス・メルロ＝ポンティである。「われわれはいままで、対象から自分をもぎ離そうとするデカルト的伝統に慣らされてきた。すなわち、反省的態度は、一方では身体を内面性なき諸部分の総和として、他方では精神を隔てなく自己自身に全的に現前する存在として定義づけることによって、身体と精神との常識的概念を同時に純化したわけである[1969, p.324]」とするメルロ＝ポンティはデカルト的な(心身)二元論を批判的に乗り越えようとする。デカルトにおいて、一方では、物や対象にはいかなる内面や自発性もなく、ただ機械論的な因果にしたがうものとして純化される。他方では、この機械的因果を断ち切る、「我思う、ゆえに、我在り」においては《私》→《私》へと意識を向けて、思考を触発することで能動的に精神を純化するのである。デカルトにとって精神とは、この純粋に能動的なものだけである。日常的な意識は物や対象との因果によって成立するので身体の側にあり、それは受動的に因果にしたがうだけなのだ。

デカルトは身体を一つの対象として考えたのであり、それは客観的に認識される対象となってしまう。それに対して、メルロ＝ポンティは「私が人体を認識する唯一の方法は、みずからそれを生きること、つまり、その人体の関したドラマを私の方でとらえ直し、その人体と合体することだけである。したがって、私とは私の身体である[同上, p.325]」として、身体とはまさに生きられるものであり、実存であり、そして、生きた証であるとする。メルロ＝ポンティにとって身体とは「身体図式」であり、私たちの日常的行為を可能にさせてくるものである。たとえば、ブラインドタッチを行うためにキーボードの配置を記憶しておく必要はなく、キーボードの打ち方は身体において図式化されており、その図式が行為を背後で可能にさせる。私たちは無数の身体図式を肉体のなかに潜ませており、箸をもつ、自転車に乗る、ギターを弾く、泳ぐ…などあらゆる日常の行為において、意図せずとも図式がすでに背後で働いて行為をしているのだ。一度、自転車の乗り方や泳ぎ方を習得すると忘れることがないのは、この身体図式が定着しているからである。

また、身体図式は状況におうじて、壊れて、訓練によって、新たに獲得することができる。スポーツ選手のフォーム改造は、まずは動きを要素に分解して反復

練習をして、最後にそれらが一連の動きとなることで新たなフォームの図式となる。しかしながら、場合によっては、以前のフォームの図式が壊れずに残り続けることで、新たな図式の邪魔をしてしまうこともある。その選手はまさにそのフォームでプレーをして生きてきたのであって、実存そのものであったのだ（スポーツ科学は暗黙知である身体図式の解明に貢献するが、身体図式の流れを部分的な対象として認識するので、一連の動きを勝手に分解してしまう「イップス」という弊害を生み出す）。そして、場合によっては、身体図式と現在の肉体との間にズレが生じてしまうこともある。メルロ＝ポンティが例にとるのは、四肢の切断後に生じることのある、もう存在しないはずの四肢やその四肢に痛みを感じる幻影肢（痛）である。

腕の幻影肢をもつとは、その腕だけに可能な一切の諸行動に今までどおり開かれてであろうとすることであり、切断以前にもっていた実践的領野をいまもなお保持しようとするのだ。…字を書くとかピアノを弾くとかの企てがまだみせているこの世界に向かう運動の力のなかで、病人は自分の〔世界への〕統合の確証を見いだす。ところが、世界が彼に彼の欠損を覆い隠すちょうどその瞬間に、世界はまたその欠損を彼に開示せずには措かないのだ。[同上, pp.147-148]

ここで問題なのは、現在の肉体においては腕が切断されているが、身体図式は以前の腕があった状態のままなことだ。その人物の身体図式は、その人が今までそのように生きてきたことの証となっている。しかし、今後は身体図式を現在の肉体の状態に合わせなければいけない。したがって、身体図式は肉体とは異なるのであり、さらに、《私》が理性的に考えるよりも先に、そのつどの世界に対して生きられている「匿名の自我」である。メルロ＝ポンティの生きられた身体は、デカルト的二元論のまさに「中間にあるもの」なのだ。

さらに彼はその後も「中間にあるもの」について考察し、それは、新たな身体性をもたらす「場」となる。世界においては自分だけが、人間だけが正しい知覚をもっているわけではない。人によって五感のありかたは異なるし、それぞれの種によっても五感やそれを超えた感覚のありかたは異なる。また知覚も人間が一方的につくるのではなく、たとえば、何かに触れることによって可能になるのであり、触れられた対象の助けがないとそもそも成立しない（アフォーダンス理

論：事物はあらかじめ「それがどのようなものか」という情報を発しており、それに人間が適合することで行為が生まれる）。たとえば、道具を使うことによる知覚は、その道具を生み出すのにも、多くの過去の人々の知覚がかかわったのであり、そこには試行錯誤や修正発展のための無数の知覚があったのだ。ただの道具にも、「自分が道具を使う―道具の助けを借りる」という知覚の可逆性だけではなく、「自分が現在において道具を使う―無数の過去の人々の試行錯誤の知覚が道具を可能にする」という過去と現在にかかわる可逆性もある。そこには、触れる―触れられる、見る―見られるなどの可逆性があるのだ。

私たちは自分たちの肉体で知覚をつくりだしているが、それは世界にある知覚のほんの一部でしかない。それ以外の知覚は、他のさまざまな種や無機物などが共働することによって生まれている。メルロ＝ポンティは、この世界全体の知覚や身体を「肉[chair]」と呼び、それぞれの種や対象物はそこから、自分たちの知覚を引き出していると考えた。「肉」の中にはさまざまな他者の知覚があり、その身体が入れ子状やフラクタル状に残されていることになる。

われわれは、あくまでも自然的人間のままで、われわれの内に身を置くとともに物の内に身を置き、われわれの内に身を置くとともに他者の内に身を置いているのであり、その地点では、われわれは、一種の交叉[chiasma]によって他者になり、また世界になるのである。[メルロ＝ポンティ, pp.224-225]

この考えによれば、私たちは主体かつ対象、自己であるとともに他者である。そして、つねに助け―助けられ、持ちつ―持たれつの関係にある。ある意味では世界において、「メディア」としてのこの交叉の「場」がつねに存在し、知覚、行動、意識、そして、思考などを生み出している。それは能動的に自らしたことでもあり、受動的になされてしまったものでもあるのだ。

完全に自由になれないということは、完全に強制された状態にも陥らないということである。中動態の世界を生きるとはおそらくそういうことだ、われわれは中動態を生きており、ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく。[國分, pp.293-294]

國分功一郎はメルロ＝ポンティではなく、言語や言語学から同じく「中間的なもの」である「中動態」という様態を見いだしている。あらゆるところに「メディア」が偏在しているという考えは非常に興味深い、言語を別の仕方でも考察することもできるし、もっと別の自由のありかたもあるのではないだろうか。

#### 4. 「管理社会」—権力の「場」としての身体—

國分功一郎は、「ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく」としていたが、それは本当なのであろうか。たとえば、ジル・ドゥルーズは「管理社会について」で、現代における新たな社会と権力のありかたを分析している。かつては、学校、家族、工場、病院、監獄などそれぞれの場所で、異なった身体の行動が要請されており、その場所におうじて市民に規律の訓練をしなければいけなかった。それぞれの場所にはそれぞれのルールがあり、ほかの場所で別のルールを勝手に個人が適用すると混乱や支障となる。そのためには、いちいち市民の身体をそれぞれの規律の型に嵌めなければいけなかったのだ。場所におうじた型に嵌めていくこのタイプの権力は、時間も、費用も、労力もかかってしまう。何よりも、市民の健康をふくめてさまざまな意味で上から見守ってやらねばならない。ただしそれは、社会の構成要素としてすぐに死なれては困るという理由においてである。

しかしながら、社会はやがて変動していき、もっと効率のよい権力のありかたになっていく。そのポイントは、さまざまなところで敵対関係をつくり、市民たちに勝手に競わせ、それによって社会を動かしていくのだ。その変化の始まりとして、給料は固定給から能力給になり、合格点が平常点になり、学校が生涯学習となった[ドゥルーズ, 2007, p.360]。まずは、働きかたの変化である。上から命じられるのではなく、ライバルに負けないために、自分で考えて新たなアイデアを出していかなければ、競争のなかで勝ち残っていくことはできない。立ち止まってしまうと、ライバルに負けて給料は下がり、最後には仕事をクビになってしまう。こうした方法は教育にも適用される。たとえば、赤点を取ったら合格まで補習していたのを、全体のなかでの位置を生徒に分からせるために自分の点数と比較させる平常点や偏差値を用いて、ライバルとなる者を認識させおたがいの競争をあおるのである。

また、学習は上から生徒や労働者に詰めこみたいものを勉強させるのではなく、競争のなかで生き延びるために、個人が自分で勉強するべきことを見つけて勝

手に勉強をするのである。そして、それは生涯ずっと学習して社会において有益でいなければならないことを意味する。それに対して、自己啓発が現代において人気なのはなぜか。それは、本気で勉強するのは効率が悪く、誰でもできる方法論だけを真似して、自分を有益なように見せかけることへと学習が移行したからである。重要なのは、競争のなかで「ただ生き延びること」であって、その手段の善し悪しは関係ない。そして、一番の大きな変化は、これまで「成人病」とよばれていたものが、「生活習慣病」へと名前を変えられたことである。成人になるとどうしてもなってしまう病から、自分の生活習慣が悪いから、自分で自分をコントロールできないからなってしまう病へと定義が変化した。そして、これ以降、「自己責任」という言葉が社会に拡散されていく（すべて、「生き延びること」で動機づけられているのだから、行動と思考の原因は権力の形態であるはずなのだが）。

私たちはただ生き延びることで動機づけられており、資本主義や新自由主義に反対する立場の人であろうと、そのことには変わらない。すべての人の身体が医療によって可視化され、次々とつくられていく病名、そして、健康と不健康さについてのさまざまな言葉が身体を包囲する。したがって、これは政治・社会問題についての立場を超えて、テクノロジーや医療の発展、電子技術や情報化社会がもたらした傾向性であろう。

いま目の前にあるのは、もはや群れと個人の対立ではない。分割不可能だった個人[individus]は分割によってその性質を変化させる「可分性」[dividuels]となり、群れのほうもサンプルかデータ、あるいはマーケットか「データバンク」に化けてしまう。[ドゥルーズ, 2007, p.361]

現代はビッグデータの時代であり、何かをするたびに、それは新たなデータとして蓄積される。ネット上で何を検索し、何を買い、どんな動画を見て、何を話し、どの駅からどこまでが行動範囲で、コンビニや店で何を買い、どのような人たちと行動を共にしているか…。私たちの思考と身体はビッグデータによってつねに可視化され、その人の思考と身体の行動がどのような傾向にあるのかが、統計的にまとめられて分析され、(余計なおせっかいでしかない)「あなたへのおススメ」としてさらなる思考と身体への動機づけ[ドゥルーズ, 2007, p.366]として返ってくる。ここではプライバシーや、その人がどんな人なのかということはそれほど重

要ではなく、分析する側もそんなことには興味がない。ただ、こうして与えられる「動機づけ」「おススメ」こそが、私たちが生き延びるための糧になるのだ。

現代において私たちが生きている「管理社会」とは、誰かが、あるいは、強い権力が上からコントロールする社会ではない。それは、個人が生き延びるために自分で自分のことをコントロールする、あるいは、「生き延びること」に身体の振る舞いをコントロールされる、あるいは、「生き延びること」に身体の生と潜勢力を服従させる社会のことである。かつて、場所ごとに身体を規律訓練してきた権力であったが、現代ではそれぞれの市民の身体が権力の「場」となった。この社会では「生き延びなければならない」という原則が、すべての人の頭のなかで「なさねばならぬ」と鳴り響き、その力に身体は突き動かされる。これは高度な資本主義の原則にしたがった、理想的な効率性の社会であり、自分の生死をかけて市民が勝手に競い合って社会を発展させていくものである。管理社会の最大の問題点は、「生き延びること」という一見するとともにもらしく思える理念を原則とすること、この権力に反抗する方法を見つけることは容易ではないことである。この権力形態に反抗するためには、はっきり言ってしまうと、死ぬしかないのだ。「中間的なもの」や「中動態」といった曖昧な考え方（こうした理論は、そこにどんな関係があり、どんなことが起こるのかを具体的に述べない。ただ、中間的なものが関係性を変えて、変化をもたらす「だろう」とする）、あるいは、「ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく」などという発言は、すべてを見えなくさせてしまう。

## 5. “vice-diction”による新たな思考と身体の「場」

マクルーハンは技術決定論的な考え方をとっていたが、「ただ生き延びること」やそこへと身体の行動と振る舞いを服従させることは、まさに、現代のメディア状況がもたらした変化であるだろう。かつてメディアは、そのつどの場所や機会において用いられるものであったが、現代では肌身離さずパソコンと携帯端末を用いるのであり、まさにあらゆるところに「メディア」が偏在しているのだ。そして、私たちはつねにさまざまな情報に触れている。ところで、ドゥルーズは情報という概念について、以下のように述べている。

情報科学の最も一般的なシェーマは、原則として最大の理想的情報を提起し、冗長性は理論的

値がノイズにおおわれてしまわないように、ノイズを減少させる限定的条件と見なされる。われわれは逆に、何よりもまず指令語の冗長性があり、情報は指令語の伝達にとって最小条件にすぎないと考える（だからノイズを情報と対立させる余地はなく、むしろ言語に働きかけるあらゆる不規則を、規則または「文法性」としての指令語に対立させる）。冗長性は、二つの形態をもつ。頻度と共振である。前者は、情報の意味性にかかわり、後者（私=私）は、伝達の主体性にかかわるのである。しかし、まさに、この見かたから明らかになるのは、情報や伝達、さらに意味性や主体化さえも冗長性に従属することだ。…支配的な意味と無関係な意味性はなく、確立された服従の秩序と無関係な主体化はない。二つとも与えられた社会的領野における指令語の性格と伝播にもとづいているのだ。[Deleuze, 1980, pp.100-101]

この引用から、現代のメディアにおける問題点を考えることが可能だろう。現代における言語の支配的な効果の一つは、(1)共振による伝達の主体性：他人の身体を強制的に敵（アンチ）と味方（ファン[《私》=《私》]）に分ける、(2)頻度による情報の意味性：その言葉の内容とは別の利己的な（ただ生き延びるために名前と顔を広める）効果を、言葉がメディアを介して何度も拡散されることで引き出すことである。

一つの例として、フランスのサルコジ元大統領の“Ce sont des voyous, des racailles, je persiste et je signe[やつらはクズ、ゴロツキ、そのことに《私》は固執する。]”という発言をみてみよう。これは本来であれば、移民や自身に批判的な若者に対して「社会のくずを一掃する」と言ったことについて、インタビューで問われたことへの返答の言葉である。しかしながら、マウリツィオ・ラッツァラートは、この言葉にはまったく別の効果があることを分析している。この「言表行為は、一定の社会政治的な状況において、その状況そのものを変えようとして発せられたものだ。『支持者』に訴えかけ、『反対者』を特定することで、このような言表行為は『反対者』を脅しつけ、『支持者』を再確認し、強化する。仲間を見つけだし、新しい協調関係を打ち立てるために[ラッツァラート,p.226]あるのであり、そのような効果をマス・メディアにおいて発揮してしまっている。つまり、《クズ》や《ゴロツキ》は特定の誰かを指しているというよりも、この言葉はさまざまなメディアをつうじて頻繁に何度も報道され、

フランス全土の人に「お前はどの《クズ》なのか？」と問いかけ、敵になるか味方になるのかを、あらゆる《私》に命令するのである。これが「頻度」と「共振」の一つの例であり、メディアをつうじて反復してこの言表行為がひろまり、サルコジと同じ考えをもつ《私》へとその言葉は共鳴することになる[霜山, 2021]。

《私》とはただの一人称単数の人称代名詞であるのだが、実際にはすべての人がその《私》になりうるのであり、その《私》になるか、ならないのかを決めることは強制されているのだ(デカルトの問題は言語について思考しなかったことである)。また動画投稿者が、あるいは、Twitterなどで《みんな》という言葉が連呼されるのは、それによってアンチとファンを分けて、何度も競わせることで、「頻度」と「共振」によって双方が自分の利益のために増えることを期待しているからである。ところで、國分功一郎は中動態論者として、「ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく」としていたが、言語学を参考にしてはいても、現代社会における言語の問題をまったく考えていない。

「ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく」どころか、《敵》か《味方》として認識される身体を持つ《私》になることは完全に強制されているからである。あるいは、メルロ＝ポンティのように身体性として「中間的なもの」を本質的に考察するならばよいが、言語の一樣態にすぎない「中動態」をあらゆるものに無差別に適用しようとするのは、そのどちらでもないことだけが残り(主体と対象の間で何かが起こっている「風」な言説)、曖昧なままですべてが終わってしまう。それは、あたかも何か言っているだけであり、そして、その効果は「《私》も中動態論者である」という言葉が何度も拡散され、その《私》に共鳴する人が増えることを期待しているかのようだ。そこでは、「中動態」の助け一助けられ、持ちつ一持たれつという優しそうなイメージも手助けとして作用する。

「中動態」という曖昧なだけの言説に嵌らないために、そして「ただ生き延びる」ことを身体に強制する権力に対抗するにはどのような方法があるのか。それは、マクルーハンが放棄したメディアの「内容」に別の仕方注目することであり、そこから新たな思考と身体の身振りを引きだすことである。そのために、かつてメディア上に拡散された、“Je suis Charlie. 「《私》はシャルリーである。」”という言葉について問うてみよう。これはフランス・パリにある週刊風刺新聞「シャルリー・エブド」で12人が死亡した2015年1月7日のテロ事件後、表現の自由を支持する人たちによ

て掲げられたスローガンである。さらにTwitterで発信されてこの言葉は世界中に広く拡散され、この表現はあらゆるところで引用され、Twitter上ではハッシュタグ「#jesuischarlie」が生成された。当然のように、世界中の人がメディア上で「《私》はシャルリーである」と発話したが、その人(その《私》の身体)はシャルリーではない。しかしながら、やはりこの言葉も《敵》か《味方》として認識される身体を持つ《私》になることを強制する。おそらく、正確な意味としては「《私》はシャルリーである」ではなく、「《あなた》も味方でしょ？」という強要も含めた問いかけである。

それに対して、一部のジャーナリストたちが“Je ne suis pas Charlie 「《私》はシャルリーではない。」”や“Je suis Charlie? 「《私》はシャルリーなの？」”といったハッシュタグを生成させた。これらの言葉は、ただだんに「《私》はシャルリー」を否定したものでしょうか。また、「表現の自由」の否定、イスラム過激派を支持する言葉でしょうか。むしろ、集団心理や同調圧力によって《敵》か《味方》になることを強制する行為を告発し、それを無化する対抗的な身体的身振りではないか。「《私》はシャルリーである」は《敵》と《味方》を指差するような身振りであるが、一部のジャーナリストたちの行為はその強制を振りほどいて、そこから思考と身体を解放するような身振りとなる。それはただだんに、「《私》はシャルリーではない。」と(ヘーゲルのようにあらかじめ回収されることが前提とされた)矛盾するものとして否定するのではなく、「《私》はシャルリーである」という言葉がいったいどれだけの効果を暗に隠しているのか、それにいかに対抗するのか、と問うまったく強制されていない自由な(自らに由る:自己原因に駆動される)問いである。たとえば、それは以下のように、この言葉がもつ効果を、それぞれの《私》がどのように望んだのかを、それぞれの《私》に成りきるまでに深く掘り下げて問い、それに対抗するような言説をもたらすことである。

(1) 《私》は表現の自由と何となく思われる、権威とされる対象をただ風刺する行為をしていた。だが、それはむしろ、風刺の対象があるから成立し、それに依存しているのではないか。自分ではないものに頼って行動するのは自由ではない。(2) 《私》はテロによる身体への暴力は否定する。しかしながら、同じように、無意識の人種的・宗教的差別を含んだペンによる暴力があったのではないか、したがって、それも否定されなければならない。そうすれば、「シャルリー・エブ

ド」に対する暴力も起こらなかつただろう。(3)《私》「表現の自由」を守り、「イスラム過激派」に反対する。しかしながら、この問題はそんな単純なことに還元されていないのか。先進国の中東政策やフランスの同化政策など、世界的・社会的な問題や、さまざまな個人の欲望に関わっている。それをすべて無かつたことにして、SNS上でのハッシュタグで《敵》か《味方》になるかを強制することには反対する。(4)「《私》はシャルリー。」このスローガンを含む画像をアイコンにしておけば、他人からはリベラルな人間と思われるだろう、というような安易な発想に反対する。

ドゥルーズはこのような手順を踏んで、安易に否定するのではなく、それぞれの言葉の効果がどのような社会的関係や、権力、制度、文化などによって成立しているかを問う方法論を以下のように述べている。

私たちは、矛盾という手順とはまったく異なるそうした手順を、副次的矛盾[vice-diction]と呼ばなければなりません。副次的矛盾の本領は、ある多様体＝多様性としての理念を踏査するということです。…名詞的なものとして用いるこの「多様体＝多様性」は、ある領域を指し示しています。…その領域では、理念は、「誰が」、「どのように」、「どのくらい」、「いつ、どこで」、「どのような場合に」といった問いによってでしか規定されえないのです。それらすべての問いの形式は、それ[理念]に関して真の時空座標を描きます。

[ドゥルーズ, p.200]

“vice-diction”は「副次的矛盾」と訳されているが、むしろ、「副次的な話法[vice=副+diction=話し方、発言]」と捉えておいた方がよいであろう。ここでの問題点は、それぞれの《私》が「～とは何か」という仕方で、それぞれの「理念(正義、表現の自由、平和、テロ、悪、暴力)」を問うていることである。これに正面から反対してしまうと、相手の「理念」の基準に回収されてしまい(ヘーゲルの差異)、自由に問い、思考することができなくなってしまうのだ(「個人の自由だ!」「多様な意見を認めろ!」=攻撃手段としての多様性)。また、この方法論はライブニッツから影響を受けているが、彼の無限小の差異は、あくまで、唯一の世界において収束するものであり、最善ではないものは他の可能世界への発散させられてしまう(ライブニッツの共可能なものだけの差異)。“vice-diction”

の要点は、この世界において人はひとつの身体において、ひとりの《私》でしかないのだが、そこに、さまざまな《私》へとつねに同時的に生成変化していく時空間の「場」をもたらすことである。

生成変化は逆行的であり、逆行は創造的だ。…与えられた複数の項の「あいだ」を、特定可能な関係にしたがって、みずからの線に沿って逃走するようなブロックをなすことなのだ。  
[Deleuze, p.292]

それは、非共可能なさまざまな《私》を離接的なままで維持しつつ、(ある視点からではなく)それぞれの思考とその原因をそのままで把握し、それぞれがばら撒く「ただ生き延びる」ための利己的な効果を無化する。そして、あらゆる思考と身体の振る舞いを強制する諸力を感覚可能にすることで対抗する、それらから解放された新たな身体の振る舞いとなるであろう。“vice-diction”は、あらゆるところに偏在するメディアとその「内容」を創造的に流用し、マクルーハンのような器官によって感覚を切り捨てる身体とは異なる、集合的な対抗的身体をもたらす(「器官なき身体」)。それは、さまざまな《私》の間にあり逃走線を発見できる「不可識別の閾」、あるいは、言葉や見せかけだけではない「多様体＝多様性」をそのまま生きていくことを可能にするだろう。

## 文 献

伊藤秀一、「メディア環境と文化——フリードリヒ・キットラーにおける文化媒質理論」、『長崎大学総合環境研究 2(1)』, 1999年, pp. 1-12.  
W・テレンス・ゴードン、『マクルーハン』, 宮澤淳一訳, ちくま学芸文庫, 2003年.  
マーシャル・マクルーハン、『メディアはマッサージである』, 門林岳史訳, 河出文庫, 2015年.  
マーシャル・マクルーハン、『メディア論』, 栗原裕・河本仲聖訳, みすず書房, 1988年.  
モーリス・メルロ＝ポンティ、『知覚の現象学 I』, 竹内芳郎・小木貞孝訳, みすず書房, 1969年.  
モーリス・メルロ＝ポンティ、『見えるものと見えないもの』, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1989年.  
國分功一郎、『中動態の世界』, 医学書院, 2021年.  
ジル・ドゥルーズ、『記号と事件 1972-1990年の対話』, 宮林寛訳, 河出書房, 2007年.  
Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Mille Plateaux*, Les Éditions de Minuit, 1980.  
マウリツィオ・ラツァラート、『記号と機械』, 杉村昌昭・松田正貴訳, 共和国, 2015年.  
霜山博也, 「言語とイメージの「ウイルス的転回」」, 『社会情報システム学シンポジウム学術講演論文集 27』, 2021年.  
ジル・ドゥルーズ, 「ドラマ化の方法」, 『無人島 1953-1968』, 財津理訳, 河出書房新社, 2003年, pp.195-248.